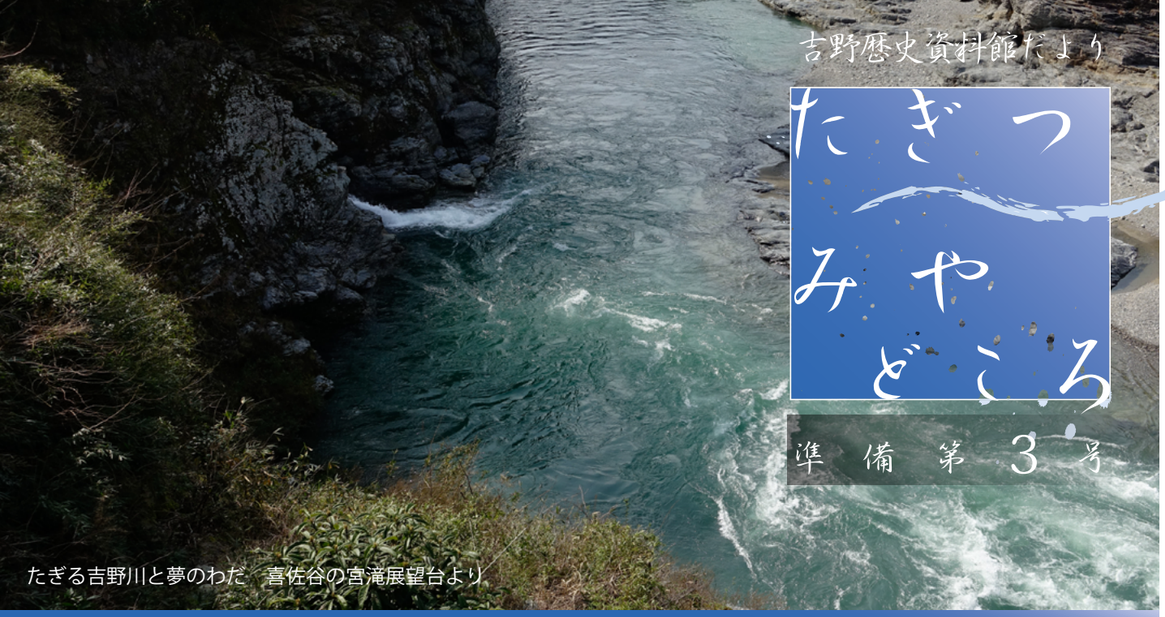

吉野歴史資料館だより

たぎつ みやどころ

準備第3号

たぎる吉野川と夢のわだ　喜佐谷の宮滝展望台より

【特別寄稿】菅谷文則氏が語る、宮滝へと続く吉野の歴史 ―「日本史と吉野」

【編集】吉野歴史資料館（奈良県吉野郡吉野町宮滝 348）【発行】吉野町教育委員会事務局（奈良県吉野郡吉野町上市 133）
【発行日】平成 28 年 7 月 1 日 【ご意見・お問い合わせ先】吉野町教育委員会事務局（tel : 0746-32-0190 、fax : 0746-32-5689 、mail : syakai_e@town.yoshino.lg.jp） 吉野歴史資料館は 3 ～ 11 月の土日祝開館　水木金のご利用には予約が必要です

《ニュース トンビの眼》吉野、日本遺産に認定さる！

平成二八年四月、吉野町を含む郡内八カ町村がもつストーリー、「森に育まれ、森を育んだ人々の暮らしとここころ～美林連なる造林発祥の地”吉野”～」が日本遺産に認定されました。

日本遺産とは、「地域の歴史的魅力や特色を通して日本の文化・伝統を語るストーリーを認定」し、そのストーリーに関わる様々な遺産を活用・発信することで、地域活性化を促そうというものです。今回の申請にあたり、吉野では吉野の山々がもつ天然林と人工林、そしてそこに暮らす人々の暮らしとこころにストーリーを見出しました。

吉野の歴史を紐解くと、樽丸が灘の酒造業を支えた等、吉野の森が大きな役割を果たしてきたことが分かります。これまで、吉野といえば桜の印象が強かったかと思いますが、今回の認定をうけ、森についてもPRしていく方針です。

青根ヶ峯からみる吉野の山々

モミのつぶやき

ねぇねぇ、聞いた？この冬の間に、本当に宮滝遺跡の調査をやってたんだって！ボクは寝てたから見てないんだけど…、友達のオゴロモチ（もぐら）君が毎日穴を掘ってのぞき見してたんだ。見てたことを教えてもらったよ。

宮滝には、大きく飛鳥時代のモノが見つかる場所と奈良時代のモノが見つかる場所がある。今回調査していた場所は、奈良時代の場所みたい。ここは、石敷きの通路跡や石組み溝なんかが見つかっていて、奈良時代の離宮跡と考えられている所なんだ。

今回は十ヶ所、調査区を設けて調査したんだって。石が一列に並んで据えられている（石組み溝の底石？）のや、大きな土坑が見つかったとか。へぇ。見たかったなぁ。

今年度は、さらに広い範囲を調査予定なんだって。うまくいけばまた何か見つかるかも！楽しみだなぁ。

【担当者ボヤく】

本当にモグラには、手をやきました。毎日調査区に新しい穴が…。

調査で確認された石列

平成 28 年度夏季 吉野歴史資料館イベントのおしらせ・報告

※各イベントは、開始２時間前に何らかの気象警報が吉野町又は実施地にだされた場合、中止します。
※○は発行日時点で受付等を終了しております。最新情報は『広報よしの』でご確認ください。

公開講演会（事例報告・講演）

●平成二八年 九月四日（日）
「平成二七年度 史跡宮滝遺跡試掘調査」
報告：中東洋行（吉野歴史資料館学芸員）
「日本書紀の中の吉野」
講師：菅谷 文則 氏
（奈良県立橿原考古学研究所長）
時間：一四時～一五時三〇分
場所：吉野町中央公民館　定員：八〇名
費用：五〇〇円　要申し込み

現地学習会

○平成二八年 六月 一八日（土）【終了】
「国立文楽劇場『妹背山婦女庭訓』観劇」
内容：『妹背山婦女庭訓』は吉野を舞台とする人形浄瑠璃や歌舞伎の演目です。今回は国立文楽劇場で上演される『妹背山婦女庭訓』を観劇しました。
参加人数：二一名　行先：国立文楽劇場
場所：吉野歴史資料館　費用：三〇〇円

上野誠の吉野万葉塾

●平成二八年 九月 一八日（日）
「万葉びとの洗濯」
講師：上野　誠 氏（奈良大学文学部教授）
時間：一四時～一五時三〇分
場所：吉野町中央公民館　定員：四〇名
費用：五〇〇円　要申し込み

ヒストリートーク　※申し込み不要

○平成二八年 五月 二一日（土）【終了】
「後醍醐天皇導稲荷社の伝承の成立」
○平成二八年 六月 一七日（金）【終了】
「モノから南北朝時代をみてみると」
●平成二八年 七月 一五日（金）
「岩倉千軒と鎌倉千軒に行ってきました」
●平成二八年 八月 一九日（金）
「片腹の魚の淵源を探る」
時間：金曜一九時三〇分～二〇時三〇分
土曜一四時～一五時

吉野を学ぶ歴史講座 part1

●平成二八年 七月 二三日（土）
「龍門騒動の村々」
講師：池田 淳（吉野歴史資料館長）
●平成二八年 七月 三一日（日）
「百姓一揆としての龍門騒動の特色」
講師：谷山 正道 氏（天理大学文学部教授）
●平成二八年 八月 二〇日（土）
「史料から龍門騒動の真相に迫る」
講師：谷山 正道 氏（天理大学文学部教授）
時間：一四時～一五時三〇分
場所：吉野町中央公民館　定員：四〇名
費用：三〇〇円　要申し込み

特別陳列

○平成二八年 五月 二三日（土）
～六月 二六日（日）【終了】
「平成二七年度 史跡宮滝遺跡試掘調査 速報展」
会場：吉野歴史資料館
※展示終了後、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の「大和を掘る」展に出展します。

申込みが必要な講座等への参加には…
ＦＡＸ、往復はがき、mail（PC）いずれかで、吉野町教育委員会事務局までお名前・ご住所・電話番号・参加希望講座をお知らせください。

【特別寄稿】

日本史と吉野

奈良県立橿原考古学研究所　所長　菅谷文則

◇

天武天皇の歌として『万葉集』に次の歌がある。

良き人の　良しとよく見て
良しと言ひし　吉野よく見よ
良き人よく見
（『万葉集』巻一・二十七）

「よし」という音が、短歌三一文字のうちに、何度も用いられている特異な歌とされている。吉野は立派である。一度は吉野に行きその良さを体感せよとの歌意のようである。この立派さは、金満的立派さではない、深く霊気を得ることができる、という意味であると思う。

それでは、吉野がなぜ霊気を人々に与えるのであろうか。

天武天皇の時代に正確な日本地図が描かれていたとは考えられないが、およその地理的観念はあったらしい。奈良盆地の最南端の飛鳥地域に都が固定されるのは、ほぼ六〇〇年頃で、それから七一〇年までは、藤原を含む飛鳥に都が置かれて居た。その頃にも、大阪湾と伊勢湾を結ぶラインから、南側に広大な山岳地帯があったことは知られていたと思う。そこから大阪湾に注ぐ吉野川（紀ノ川）と、伊勢湾に注ぐ櫛田川と宮川とである。ともに台高山脈を源流とする。

◇

紀元前五世紀頃（この数字は考古学者の間では論争中である）以降の弥生時代には、広大な山岳地帯には、人が集住して、水稲栽培をしていた形跡は、ほとんどない。

その例外の弥生時代の遺跡が宮滝遺跡である。弥生中期の典型的な大和の土器が出土している。その土器は人を埋葬するための容器として用いられていた。生活に用いたと思われる土器の出土はないらしい。紀伊半島においては、南紀の海岸地帯には、弥生文化が及んでいるが、山岳地帯には及んでいない。

弥生時代に先立つ縄文時代の遺跡は、山岳地帯にも、重要な遺跡がいく箇所も分布している。縄文時代よりも古い遺跡が、下市町桂原において発掘調査によって見つけられている。縄文文化の早期からの遺跡のうち、発掘調査が行われたのは、川上村丹生川上神社上社境内地遺跡である。関西の縄文遺跡においては、ほとんど類を見ない。石棒を地面にたてた遺構さえ検出されていた。他の遺跡は、発掘調査という考古学の研究がされていず、今も山岳地帯に眠っている。旧石器時代から縄文時代は、自然の動植物を採集あるいは狩猟して生活してきた。豊かな自然林は食料の宝庫であったと言ってもよい。

◇

歴史時代の幕開けは、宮滝の吉野宮と、大峯山であった。吉野宮は七世紀の斉明天皇に始まり、奈良時代の聖武天皇まで続き、のち宇多上皇らが訪問されることになった。その宮滝に置かれていた吉野宮の少し高いところからは、吉野山の最高所である青根ケ峯を見ることが出来る。そこから奥へ奥へと仏教者が分け入り、山岳修験の道場とした金峯山、今日の大峯山である。役行者の開山伝承は別にして、七九〇年頃に空海がその道を辿っていたことが、明らかになってきた。以下に空海の承和三（八三六）年の上表文を写しておく。

◇

紀伊国伊都郡高野の峯において
入定の処を請け乞うの表

沙門空海言す。空海聞く、山高きときはすなわち雲雨物を潤し、水積るときはすなわち魚竜産化すと。この故に耆闍の峻嶺には能仁の迹休まず。孤岸の奇峰には観世の蹤相い続く。その所由を尋ぬるに、地勢自ら爾るなり。また台嶺の五寺には禅客肩を比べ、天山の一院には定侶袂を連ぬることあり。これすなわち国の宝、民の梁なり。

（中略）

空海少年の日、好んで山水を渉覧して、吉野より南に行くこと一日、さらに西に向かって去ること両日程にして、平原の幽地あり。名づけて高野という。計るに紀伊国伊都郡の南に当れり。四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり。今思わく、上は国家の奉為に、下は諸の修行者のために、荒薮を芟り夷げて、聊か修禅の一院を建立せんと。経の中に誡めあり。山河池水はことごとくこれ国主の有なり。もし比丘、他の許さざる物を受用すれば、すなわち盗罪を犯すといえり。しかのみならず、法の興廃はことごとく天心に繋れり。もしくは大、もしくは小、あえて自由にせず。望み請うらくは、かの空地を賜うことを蒙って、早く小願を遂げん。しからばすなわち、四時に勤念してもつて雨露の施を答したてまつらん。もし天恩允許せば、請う所司に宣付したまえ。軽しく宸扆を塵して、伏して深く悚越す。沙門空海、誠惶誠恐、謹みて言す。

弘仁七年六月十九日　沙門空海上表す。

（『続遍照発揮性霊集補闕鈔巻第九』）

関連する筆者の文章として、「紀伊半島における山と人とのかかわりの歴史」（『奈良教育大学自然環境教育センター紀要第一六号』二〇一五年三月）もご参照ください。